

今回のテーマは、6/2に行ったレクチャーライブ「コール・ポーター特集」の内容から、ポーターが、「歌詞のニュアンスによって曲をどう変化させたか」というテーマについてご紹介します。当日、参加されたメルマガ読者の方もいらっしゃると思いますが、復習的に読んで頂ければと思います。

ポーター特集では、多くの曲を分析していて発見が色々あり、自分でもとても勉強になったのですが。中でも「Love For Sale」の中で、全く同じメロディとコードの繰り返しだと思込んでいた所で、実はポーターはマイナーコードとメジャーコードを使い分けることによって、曲から受ける感じを変えようとしていたのには驚きました。

ちょっと曲について説明しておきましょう。この曲は「ザ・ニューヨーカーズ」というミュージカルの中で使われました。いかがわしい人物や売春婦が登場するニューヨークの裏側を描いたストーリーです。

◎歌詞の内容を曲で表現する異様なまでのこだわり

比較的最近再上演されたと思われるミュージカルの場面集がyoutubeにあったので見てください。猥雑なストーリーの感じが何となく伝わってきます。1分31秒あたりで、Love For Saleのさわりが歌われます。
<https://www.youtube.com/watch?v=5uhJCnX8tJc>

Love For Saleは「売り物の愛」つまり売春婦の独白を歌詞にしてしまった、当時としてはかなりセンセーショナルな内容でした。この曲はしばらくの間ラジオで流すのを禁じられていたそうです。こういう内容を歌った曲ですが、曲自体は大変魅力があってアドリブしがいのあるコード進行を持っているため、インストジャズでも沢山録音され、今でも演奏されることの多い曲です。

この曲は楽譜に関しては著作権が切れているようなので一部をアップしました。この曲は、コードをどうつけるか幾つものバージョンがあるのですが、これはポーターが自筆で書いた譜面をもとにコードをつけた譜面と言われています。
<http://www.jazzlydian.com/mailmagazine/pdf/loveforsale.pdf>

□で囲ったAとかBというのはセクション記号で、曲の中のいわば段落を表します。この曲の場合、AとBの前半8小節はほとんど同じメロディなのが分かります。エラ・フィッツジェラルドの歌を聴いて確認してください。1分9秒あたりからAが始まり、1分51秒あたりからBが始まります。
<https://www.youtube.com/watch?v=KeKLo10lwrI>

歌詞はA、Bの8小節目まではそれぞれ以下のようになっています。

- ・ A Love for SALE, appetizing young love for SALE.
- ・ B Who will BUY? Who would like to sample my sup-PLY?

歌詞を大文字にした「SALE」「SALE」「BUY?」「PLY?」の小節に注目してください。Aの3-4小節が「SALE」、7-8小節も「SALE」。Bは3-4小節が「BUY?」、7-8小節が「-PLY?」となっていますね。この4箇所は、すべて同じ音（ピアノ鍵盤のファの音）を延ばしたメロディです。

普通は、繰り返しのセクションがあり、メロディが同じであればコードも同じですが、ポーターはコードを変えています。Aの部分の「SALE」という歌詞にはBbMI7（ビーフラットマイナーセブン）と書かれています。MIというのはマイナーのコードであることを指します。

次にBの「BUY」と「PLY」で、BbMA7（Bフラットメジャーセブン）と書かれていますね。MAはメジャーです。ポーターは、同じメロディなのに、Aではマイナー、Bではメジャーにしているということです。インストジャズでは、アドリブを取りやすいようにBb7などと単純化したコードで演奏することが多いのですが、ポーター自身はマイナーとメジャーを細かく分けて指定していました。

◎「売り物としての愛」をマイナーコードで表現

何でこんな手の込んだことをしたのか？どうもポーターは「sale」という歌詞のところにマイナーのコードを付けたかったようです。先程説明したように、この部分のメロディは「ファ」の音なのですが、マイナー、メジャーどちらのコードもつけられます。そういうメロディをつけておいて、「sale」という歌詞の部分はマイナーのコードをつけ、そうでない歌詞のところにはメジャーのコードをつけたということです。

とすると、曲の中で「sale」という歌詞がついている他の部分はないか気になりますよね。実は、ABセクションのそれぞれ最後の2小節でも「sale」が現れますが、ここでもマイナーのコードを付けられています。ここはメロディは「シのb」で、マイナー、メジャーどちらもつけられるのですが、直前の音がマイナーを特徴づける音なので、ここはマイナーしかないかなという感じがします。

整理すると、以下のようなになるでしょうか。

- 1 「sale」という歌詞をつけた箇所では、マイナー、メジャーどちらのコードもつけられる場合はマイナーのコードをつけた。
- 2 「sale」という歌詞をつけた箇所で、前の音からマイナーに行きたい感じの場合はマイナーのコードをつけた。
- 3 1と同じメロディの箇所でも、「sale」以外の歌詞の場合はメジャーのコードをつけた。

タイトルに含まれる「love」は、単独では素晴らしいもの、かけがえのないものというようなイメージで使われますが、「for sale」とついた瞬間に「売り物の愛」ですから、ダティー、悲しい、虚しいというニュアンスが出てきます。ポーターは、この語感を強調するために、「sale」という歌詞をつけた部分にはマイナーのコードをつけたと思われるのです。

この解釈のヒントは、ポーターの曲を分析しているアメリカ人のホームページからもらいました。その研究者は、歌詞によって曲から受ける印象を変える手法は「word painting」だとしています。つまり、歌詞によって曲の色付けを変えるということです。ポーターはこのように考えて詞と曲を書いたはずだとは言いませんが、自分としては納得できる捉え方です。

◎ポーターの意図通りのアレンジ

先程のエラの音源をもう一度聴いてみてください。Aの「SALE」のところでサックスのオブリガート（助奏）が入りますが、これを注意深く聴くと、マイナーのコードであることが分かると思います。そしてBの「BUY」と「PLY」では先程と違ってサックスがメジャーの旋律を吹いています。（譜面のキーであるBbではなく、エラはFというキーで歌っていますので、楽器で確かめたい方は参考にしてください）。

つまり、ポーターがつけたコードに忠実にアレンジされているということです。インストでこの曲を演奏する際には、アドリブしやすく「sale」の歌詞の箇所はBb7というコードで統一することが多く、それはそれでありだと思いますが、こと歌に関してはポーターの意図通りのコードで演奏するのが正しいと思います。エラ自身の注文かアレンジャーの選択かは分かりませんが、ポーターに対する敬意を感じるどころです。

ポーターに限らずスタンダードのほとんどは舞台ミュージカルの挿入歌として書かれました。そこではストーリーがあり、歌われる場面の気分を表す歌詞があり、曲はそれらを表現する必要がありました。いわばオペラのアリアと同じです。歌詞の意味するところが聴衆に十分理解してもらうのがミッションです。もちろん曲としての魅力も大きい方が望ましいわけで、最も魅力的な曲がスタンダードとして生き残ってきたわけです。

そういう背景があるにせよ、こんな風に歌詞にこだわった曲作りをしている例はポーター以外にあまりないように思います。これはやはり、自分で歌詞も書いたポーターならではのこだわりだと感じます。そして、それを実際の曲として実現できる作曲技術の奥深さがあったということでしょう。

6/2のレクチャーライブでは、この曲以外に「It's Alright Withe Me」, 「I Concentrate On You」, 「My Heart Belongs To Daddy」なども取り上げ、モチーフ展開の技やユダヤ的メロディについても解説しました。マイナーコードとメジャーコードの聴こえ方などを、解説の後すぐにピアノで弾いて確かめていただいたので分かりやすかったと思います。幸いご好評をいただいているので、次はガーシュインの特集を企画しています。

以上